教育長だより　No. 31

改訂版　　２０２４年3月６日

「静かにしなさい！」は、禁句？？

「**先生が子どもに向かって言ってはいけない言葉がある。**」と、国語教育の大家と言われる大村はまさん（※注）は言っていました。

1．「静かにしなさい！」

「（教師の）能力がなくてこの子たちを静かにする案も持てなかったし、対策ができなかったから、万策つきて、敗北の形で『静かにしなさい。』という文句を言うんだということを、私はかたく胸に刻（きざ）んでいます。・・（中略）・・ほんとうに自分を深く責めながら、自分の無力を心から恥じて、その思いのなかで、仕方ないから『静かにしなさい。』と言うのです。」

（大村はまの言葉）

みなさん、授業中に子どもたちがうるさくしていると、簡単に「静かにしなさい！」と発していませんか？　この言葉を自分の授業力量にあてはめて、「とても重い言葉だ。」と信じることから指導が始まります。この言葉を使わなくても子どもが話を聞く態勢をどうつくるかが、教師としての力量だと言えます。あなたには、この言葉を使わずに子どもを集中させ、静かにさせるポケット（引き出し）がどのくらいありますか？

2．「わかりましたか？」

このように教師が聞くと、子どもたちは「はい。」としか答えられません。また、その教師も「わかりません。」と答えられたら、その先どのように授業をすればいいのか、わからない場合もあります。大村さんは「子どもたちに真剣な答えを期待していないという、教師の甘さがある。」と書いています。

子どもにわかってもらう最大限の努力と方法を駆使しても、子どもの理解が思うように至らなかったことは、教師業をやっていて何度も経験することです。

しかし、授業の最終場面で「わかりましたか？」と聞くとしたら、これは「教師の威圧」でしかないのです。これも教師の敗北だと認める気持ちが、指導力の向上につながるのです。

日文『成長する先生のための指導のＡＢＣ』より

※注　大村はま（1906年～2005年、横浜出身、国語教育家）

東京女子大学卒業後1928年（昭和3年）に長野県諏訪高等女学校へ赴任。東京府立第八高等女学校を経て第二次世界大戦後は、新しく発足した中学校へ転じて1980年（昭和55年）まで、73歳10ヶ月まで、中学校の現職教諭であり続けた。以後も、25年間、2005年4月(98歳10ヶ月)まで、「二十一世紀の国語教育」への提言を全国各地で続けた。